俳句

大津俳句会

秋声や一人来て振る神の鈴　井芹眞一郎

今朝の秋するりと通る袖となり　秋山　恵子

語り部に七十余年の原爆忌　市原　初女

熔岩風のささやき阿蘇の初芒　江藤　みち

徒歩でゆく空地が増へて秋の風　大塚喜久子

粛々と阿蘇の稜線今朝の秋　坂本　セキ

つかの間の涼しさ来たり夕間暮れ　佐賀　久子

伐採になくなりしかな片かげり　田中ひさ美

夕風を得て風鈴の生き返る　原田　順子

化粧水終の一滴夏終わる　堀川　妙子

終戦日軍艦並ぶ島の沖　松尾　昭雅

良く見れば仲良く歩く蟻の列　武藤　規子

枝の先ゆたかに揺るる百日紅　渡邊佳代子

俳句

つのはな句会

深呼吸・そして棄教の立葵　星永　文夫

八月の午後はさみしい竹箒　田上　公代

反核やひまわり畑の乱反射　木庭　杏子

いっぽんのこよりでつなぐ八月忌　上杉　波

父の忌の端からくずす冷奴　矢嶋　道子

神として祀らる富士に夏の恋　水野　春子

赤しょうま細い山道染めて咲く　梅木トキエ

夏空へわれ白寿まで生きむとす　塚本　洋子

飯食うも笑うも家風蕎麦の花　酒井　豊美

あっけらかんと梅雨明け喪の家二軒　志賀　孝子

短歌

大津短歌会

剪りすぎて悔しい思いもややあれど
庭のエニシダ答えてくれず　渡辺佐代子

馥郁と朝の庭面は香に満ちる
白き梔子今を盛りに　岩下　文代

春たけて庭に菫のあふれるも
住み馴れし家の解体すすむ　吉永　恵子

澄んだ瞳を瞬きもせず見つめくる
曾孫愛しき初対面の日　豊岡ミツル

七十五歳故郷捨てしアブラハム
八十路の転居も天意と思えば　小平　善行

短歌

万年青短歌会

蕎麦の里阿蘇に広がる蕎麦畑の
花白々と朝日に映えて　中山　春代

罹災して三年目の夏七夕に
棚田に蛍の舞うを祈れり　山内　信子

降る雨に色あざやかにミニトマト
わが庭畑に輝やきを見す　立野　誠子

紫陽花の花咲き盛る五月雨に
蝶ゆらゆらと若き旅立ち　磯崎テル子

旅の途次子より届きし海の幸
夫と地図ひろげ思ひ出話　合志　妙子

山道の緑葉のトンネルきらきらと
風に耀ひ気力湧く如し　合志　桃花